
恋人は魔王さま？

砂那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人は魔王さま？

【Nコード】

N3076P

【作者名】

砂那

【あらすじ】

誕生日を迎えて二十五歳になったけれど、まだ恋をしたことがない響子。恋なんてめんどくさい。恋なんてしなくてもいい。そう思っていたのに。よりによって超絶美形、しかもかなり非道な魔王様に気に入られてしまった！そして無理矢理、異世界に拉致されてしまい…。無事に元の世界に戻るのか？

運命の出会い？

「……ねむう」

椅子に座ったまま、横を向いてあくびをした。

がたん、がたと電車の音が鳴り響いていて、ますます眠気を増長させる。しかも今日は、初冬だというのに暖かい。小春日和というやつかもしれない。

始発から乗るので大抵は座れる。でも長い通勤時間、電車に揺られているとさすがに眠くなる。そうでなくても朝早いのに。

そのとき。

（あ、しまった……）

マナーモードにしておくのを忘れた携帯が、軽快な音でメールの着信を告げる。周りを気にしながら携帯を開くと、友人からのメールが届いていた。

（こんな朝早くからなんじゃいな）

クリックしてメールを開く。

【やつほー、響子。四捨五入で三十だね。おめでとう！】

（な、なんてお祝いの仕方だ。嫌がらせか？　そもそもなんでわざわざ四捨五入するのだ。それにあんただって同い年でしょがっ）
震える手で携帯を握り締め、そして周囲の視線を感じて慌てて微笑む。向かい側に座っているおばあちゃんが、心なしか怯えている。どんな顔をしてたんだ、私は。

そう。

私、林田響子は本日で二十五歳になったのだ。

（二十五かあ……）

窓から見えるのどかな風景を、ぼんやりと見つめる。

二十五歳という年齢に、特に感慨はない。誕生日だって、ただこ

うして日常が続いていく中の、代わり映えのない一日に過ぎないのだ。

平凡な人生。

けれどそれは、自分が平凡な人間だからなのだろう。

それが悪いとも思わないし、平穩に毎日を過ごせるのは幸せだ。でも、思ってしまう。

何か、心が躍るような出来事はないだろうか、と。

（まあ、誕生日だからって特に何か起こる訳じゃないけど……）

いつも通りの仕事、いつも通りの帰宅時間。

そしていつもと同じ電車に乗り、家へと帰る。誕生日だからといって、特別な予定もないし、ケーキや豪華なディナーもない。でもそれは自分で望んだ事だ。

最初は誘ってくる人もいた。けれど、片っ端から断っているうちに誰も誘わなくなった。むしろ今の状態は心地良いくらいだ。

（……だって。食事に誘われても困るんだもん）

この年になつておかしいというのはわかっている。だから、親友にも打ち明けた事はない。

今まで恋をしたことがない、なんて。

男嫌いという訳ではない。

テレビに映っているような俳優を見ればかつこいいと思うし、高校時代はあるバンドのおっかけまでやっていた。

それでも、ひとりの男性を好きだと思つた事がなかった。

（まあ別にいいんだけど……。恋愛しなくても死なないし。世の中にはお見合いで結婚する人だって多いんだし）

別に男嫌いではないから、親がうるさくなってくれば見合いでもすればいい。

恋愛なんて、面倒なだけ。そう思っていた。

そしていつもの帰り道を辿り、自宅のアパートに着く。靴から鍵を取り出そうとして。

「ん？」

入り口のドアの前に、何かが落ちている事に気が付いた。

「なんだろう？」

黒くて丸い物体。しゃがんでよく見てみると、小さく蠢いている。虫かなあ？」

田舎に住んでいた為に、虫が出たくらいで悲鳴を上げたりはしないが、じっくり眺める気にはなれない。持っている靴で追ひ払おうと、ぱたぱたと仰いでみる。

「ほーら、あっちへ行けえ」

そのときだった。

「貴様。何をする」

若い男の、しかも偉そうな声が響いてきたのは。

異世界の王様？

「ん？ 今、何か聞こえたような」

首を傾げ、周囲を見渡してみるが、もちろん誰もいない。

「まさかこの虫が？」

「我を虫だと？ この無礼者め」

再び、謎の声。響子はおそろおそろ、扉の前に落ちている虫を覗き込んだ。

形はコオロギに似ている。大きさもそれくらいだろう。ただ、触角が銀色だった。

「今喋ったのは、あなた？」

「他に誰がいるのだ」

返ってきたのはやはり偉そうな声。

「なんでコオロギが喋っているの？」

「……我はコオロギではない」

ぶるり、と目の前の虫が震えた。いくら暖かくても季節はもう冬。虫（ではないと言い張っているけれど）にはつらい季節だろう。

「とりあえず寒いし、中で話そう？」

虫と話す、というのも変だが、実際に声が聞こえるのだから仕方ない。

それに、不思議な出来事には結構慣れている。

潰さないようにそつとコオロギを抱き上げ、鍵を開けてドアを開く。

電気をつけ、そしてすぐに暖房を入れた。手の中のコオロギを何処に置いたらいいか少し迷う。

「床でいい。下ろしてくれ」

先程までの傲慢な態度とは裏腹に、静かな声が聞こえていた。それに素直に従い、響子はそつと床に置く。

「そなたは不思議な女だな。隣の部屋にいた女は、我を見た途端、

踏み潰そうとしてきたぞ」

隣のおばさんの顔を思い出し、響子は苦笑した。あのパワフルなおばさんに踏み潰されそうになるのは、とても怖いかもしれない。

「まあ、さっきも言ったように慣れてるの。弟が色々と「みえる」子でね。不思議な話ならずっと聞かされてたから」

実家に暮らしている家族を思い出し、響子は目を細める。彼女自身にはそういう力はなかったが、弟の作り話だと疑った事は一度もなかった。世の中には、説明出来ないような事がきつとあるのだ。

「でもさすがに自分が遭遇するのは初めてで、ちよつとびっくりしたけど。それで、あなたは何者なの？」

「……」

コオロギはすぐには答えなかった。自分が何者なのか。その沈黙は、記憶を手繰り寄せるかのように長く。

「我は、王だ」

やがてぼつり、と呟いた。

「万の民を束ねる王だった。だが、ある者が己の利益の為に我が国を滅ぼし、そして我は敗れ、封じられたのだ」

「お、おうさま？」

想像以上にファンタジーな話に、響子は少し戸惑う。

だが、弟は言っていた。世界はひとつではないだ、と。ならば彼は、ここではないどこか別の世界に生きる王だったのだろうか。

「王様の国は、なくなっちゃったの？」

「複数で急襲され、腹心の部下達も皆倒された。このままでは、あやつらも浮かばれん。何とか敵を取りたい」

小さなコオロギの震える声。

もし響子が男だったら、その話をそのまま信じる事はなかったかもしれない。

だが中学生や高校生の頃、少女小説のファンタジーにはまった経験のある響子は、仲間を思い、国を思う王の言葉をすっかりと信じ切ってしまった。

「あなたが私の部屋にいたのも、何かの縁かもしれない。何か手伝える事があつたら言つてね」

そう告げた響子を、じつと見つめるコオロギ。

「ならば、我が元の姿に戻るのを手伝つてはくれないか？」

なんだか様子が変だな、とは思つた。先程とは違い、こんなにも小さなコオロギから威圧感を受ける。だが、手伝うと言つた以上、断る事も出来ない。

「うん。いいよ」

そう答えた途端。

周囲が真っ暗になつた。何も見えない。自分の手すら見えない、深い闇。

「え？ な、何よこれ……」

「そなたは我と契約した」

ふと、闇が退いた。現れたその声の主に従うかのように。

まだ周囲は薄暗いが、それでも周囲が見渡せるようにはなつていた。

顔を上げて、その声の主を見上げる。

そこには、ひとりの男がいた。

長い銀の髪。そして、まるで爬虫類のような紅い瞳。煌めく銀の髪を引き立たせる、褐色の肌。そして恐怖を覚える程の、壮絶な美。人間とは思えぬ者の姿が、そこにはあつた。

ここは何処？

「わ、私騙された？」

「騙してなどおらぬぞ」

彼は少し首を傾げる。優美なその身を包む装飾品が、しゃらりと音を立てた。

「偽りなく我は王だ。幾万の魔を従える、魔界の王」

そ、それはもしや魔王さまというやつでは？

「わ、私つてば。私つてば。もしかしくなくても、魔王の封印を解いてしまった……とか」

封じられていた、と言っていた。そして魔王を封じた者は魔界を滅ぼした、とも言った。

だとしたら、それは。その相手は。

「あの、もしかして魔界を滅ぼしたという人は……」

「天啓を受けし聖戦士。勇者ラール」

やっぱり勇者かッ！

響子はあまりにも想像通りの展開に溜息をつく。

「でも勇者でしょ。勇者が己の利益の為に魔界を滅ぼすって事はないでしょ？ それにひとりに複数つて。やっぱり嘘じゃ」

「あやつらにもそれなりの思惑があったのだ。それは天界の命に従ったのでも、人間を救う為でもない。そもそも我は人間界を滅ぼそうなどとしていないのだから。それにパーティなどと言い、常に四人で我の部下をひとつずつ倒していった」

「た、確かにゲームでも勇者はパーティ組んでるけど……」

そう言われてみれば、確かにひとりに複数で襲いかかっていると言われても仕方ないかもしれない。

「だめだめ、なんか納得させられそうな気がしてきた。と、とにかく私は家に帰りたい。ここ、何処？」

「そなたは我と契約した。我が契約を破棄するのならば、それなり

の代償を」

「だ、代償って何かな……」

どうして迂闊に頷いてしまったのだろう。

後からどんなに後悔しても、もう遅い。

「魂を」

「ああッ。やっぱり！ 私のバカバカ。コオロギなんてほっとけばよかったのに」

響子のその言葉に、魔王はほんの少し寂しげな瞳をする。

ただでさえ整いすぎた美貌なのに、そんな顔をされたら自分が悪いような気になってしまふ。計算しているのだとしたらとんでもない悪党だ。

いや、悪党に決まっている。何せ魔王さまだ。

「取り敢えず一度帰りたい。だつてほら、ストーブ付けっぱなしだし、玄関も開いたままだし……」

すると魔王は長い指をぱちん、と鳴らした。

「ストーブ、電気は消した。元栓も閉めた。施錠してガス、水道、新聞も止めた。会社に連絡して休職届も出した」

「そ、そこまで！」

冷蔵庫のものが腐らないように電気は止めない所が素晴らしい。

「じゃなくて！ 私、やっぱり帰れないのね。ここは何処なんですか……」

「ここはかつて魔界であつた場所。今は何もなくなつてしまった。

ここに、我が国を再建する」

改めて、響子は周囲を見渡した。広い。こんなに何も無い場所で、地平線を見るのは初めてかもしれない。

とても広く、そして寂しい場所。

「ここに、あなたの王国があつたの？」

「ああ」

打倒勇者ではなく、国の再建ならばまだいいかもしれない。

響子は仕方なく、しばらくこの場所に留まる決意を固めた。それ

にどう逆らったとしても、帰してはくれないだろう。

（急に行方不明だなんて、みんな心配するだろうなあ。ごめんね……）

そこである事に気が付き、ん？ と首を傾げる。

休職届まで出し、ガス、水道、新聞まで止めて。それは、行方不明とは言わないだろう。

「ど、どう考えても私、自分の意志で失踪してるじゃんっつ」

しかも家を出たところを見た者は誰もいない。完全失踪マニユアルもびっくりだ。

「どうかしたのか？」

「い、いえ。ただ、家族が心配するだろうなあ、と思っただけです

……」

がつくりと肩を落とした響子に、魔王はある物を差し出した。

それはとても見覚えのある。手に馴染んだ……。

「これで連絡すればいいだろう？」

「こ、これは。私の携帯電話。え？ 通じるの？ 携帯通じるの？」

半信半疑で携帯を開く。

すると、馴染んだメールの着信音。

「うわ、通じた。ほんとに通じたよ？」

「これくらい造作もない」

少し得意そうな魔王。その様子に、響子も思わず頬を緩めた。

（ちょっと可愛いかも）

だがこんな表情すらも畏なのだろうか。

そんな事を考えながら、メールを開く。

お誕生日おめでとう。たまには帰っておいでね。

少しぎこちない、母からのメールだった。

（ごめん、お母さん。いつ帰れるか、わかんないかも……）

想像通りに？

「ところで、私は何をすればいいの？ それをやったら家に帰れるんでしょう？」

気を取り直して、魔王に向き直る。

何もない、無限に広がっているかのような暗闇。

魔王の傍だけはほんの少し明るい。その微かな灯りに引き寄せられるように、響子は彼の傍へと寄った。何もない暗闇を見つめると、自分が無くなってしまうような恐怖を感じた。

「帰れるかどうかは別として。お前に頼みたいのは、想像する事だ」「想像？ 創造じゃなくて？」

魔王は響子を見下ろす。その視線を受けて、随分背が高いんだなと場違いな事を考えていた。銀色の髪はこれほどの長さにも関わらず、まったく絡み合っていない。繊細な金色の鎖に飾られたその髪に、知らずに手を伸ばしていた。

（三つ編みとかしたら、怒るかなあ……）

そう思った瞬間、魔王の手が響子の手を握った。すると。

「あ、あれ？」

魔王の綺麗な銀色の髪はひとつに纏められ、緩く三つ編みにされていた。

「え？ 何で？」

彼は特に驚いた様子もない。手を放して自らの髪に触れ、響子を見下ろす。

「この方が好きなのか？」

「す、好きっていうか。ちょっとそう思っただけで……」

「お前がそう思ったからこうなったのだ。ここには今、何もない。

そして私の力は未だ完全に解放されておらず、自分の想像した通りに国を再建する事が出来ないのだ」

「ええと、つまり……」

響子は空を睨んだ。考え事をする時の癖である。そのせいで何度何も知らない友人を怯えさせたかわからない。それくらい迫力のあつ顔をして考え込んでいる。

「……私に想像して欲しいってことは、あなたは今、自分で考えた事を実行する力がないのね？ だから、私にこの国をどう再建するか考えて欲しいってこと？」

「その通りだ」

彼は微笑んだ。自分の意図を、正しく響子が理解した事に満足したような笑みだった。

その綺麗な微笑みに見惚れながら、想像するだけでいいのなら簡単だと思う。国を無事再建させれば、彼も自分を元の生活に帰してくれるだろう。

だが。

どんな国にしようかと考えを巡らせていた時に、ある問題に直面する。

（ま、魔界を再現しちゃってもいいのかなあ……）

想像しないと帰れないとはいえ、自分が魔界を再建したせいで魔王が完全に復活し、世界を支配してしまったりしたら。

（さすがにちよつと、後味悪いもんなあ）

隣にいる魔王を見上げる。

「どうした？」

「いやあ、なんていうか。魔界っぽい世界を再現するのは、私みたいな女の子には、無理かなあーって」

友人が送ってきたメール。四捨五入で三十路の文字が頭の中を三往復するが、それを頭の中で何度も踏み潰し、女の子、を強調してそう告げる。

「お前が想像している魔界がどういうものかはわからないが、そんなに難しく考えなくても良い。いつも見ているような風景、暮らしてきた町と同じで構わない」

「え？ そうなの？」

「お前が過ごしやすい国。住んでみたい城。それでいい。自分の思い通りに想像するといい。我がそれを再現する。生涯住む場所になるのだから」

魔王とも思えぬ優しい声に、どうしたらいいかと悩んでいた心が少し楽になる。自分の住みたいような、暮らしたいような場所を想像したらいいというのなら、簡単だ。

（どうせなら悪い事をする気も起こらなくなるような、メルヘンな世界にしてみようかしら）

綺麗な花畑に、ヨーロッパの古城のような城。

けれど中は現代風に住みやすくなっていて、テレビにパソコン、冷蔵庫やホームシアターもあればいいかもしれない。もちろんインターネットも通じている。

「動物も飼いたいなあ。猫に犬にうさぎ……。あとは鳥も」

小鳥の囀りが聞こえる緑の多い国。誰が魔界だと思っただろうか。きつと勇者だつて思わないに違いない。

魔王が響子の手を握った。すると、想像した通りに綺麗な花畑が目の前に現れる。

「うわあ、綺麗。一面の花畑つて、よく物語には出てくるけど、実際は見る機会ないからねえ。うん、すつごく綺麗」

その光景に満足し、今度は大きな城を想像してみる。もちろん、中は現代風だ。

響子の想像した通りに、城はたちまち目の前に出現した。まるで遊園地にある城のようだ。

「わあ……」

ここが私が生涯、住む城になるのか。満足そうに見上げ。

響子はふと、ある事に気が付いた。

「しょ、しょ、生涯って何？ さっき言っただよね？ 生涯住む場所って、言っただよね？ わ、私やつぱり帰れないのか！」

騙されてないか？

魔王に詰め寄っても、彼は言った事を忘れてしまったかのように知らん顔をするだけだ。（本気で忘れているなら痴呆症だわ……）

どんなにいい男でも、中身はコオロギ……じゃなくて、勇者に討伐された魔王なのだ。（あんまり油断しない方がいいかもしれない）自分の思い通りに力を使えない。それが枷になっていて、今はまだ大人しくしているだけなのかもしれない。

いつそ悪い事など想像出来なくなってしまうくらい、メルヘンな魔界にしてやろうか。「ところで魔王様」

「何だ？」

「魔界の住人って誰もいないの？」

確か幾千の魔を従える魔王と言っていた。だが、この無駄に広い空間には、人影（魔影？）はまったく見えない。

「魔界が消滅すれば彼等も消え去ってしまう。だが、再建すればいずれ甦るだろう」

「ふ、ふーん。そうなんだあ……」

それはやっぱり、魔界を再建させたらマズイのではないだろうか。「く、国を再建させたら、やっぱり勇者に復讐とか、したいと思っちゃよ……。思ってる？」

緊張して思いつきり噛んでしまった。そつと魔王を上目遣いで見つめる。

「そんな事は思っではいけない」

彼はそう答えた。

「我はただ、国を再建させたいだけ。この国に住まう者を甦らせたいだけだ。勇者などどうでも良い」

本心だろうか。

疑うような響子の視線に、彼は柔らかに微笑んでみせる。

「本当だ。疑われるのも無理はない。だが、我には最初から争うつ

もりはなかったのだ。攻め込んできたのは彼等の事情。一度魔界を滅ぼし、その目的を達成させたのだからもう来る事もないだろう」

美形の笑み、しかも少し憂いを含んだそれは、どうしてこう説得力を宿すのだろう。

そうよね、悪いのは彼等よね、と言いたくなるのを必死に堪える。そして、尋ねた。

「じゃあ、彼等の事情って何？」

ほんの少しだけの沈黙。そして彼は告げる。

「長い話になる。中でゆっくり話そう」

今建てたばかりの絢爛豪華な城の中に、魔王に手を引かれて入る。

（それにしても……）

想像したのが少し恥ずかしくなるくらい、豪華な城だ。

磨き上げられた美しい床の上を、銀髪の美形に手を取られて歩く。まるで夢のような光景だが、夢ではない事を切に願う。

（お城に美形の王子様って、二十五歳の女が見る夢にしては痛すぎる……）

実際には王子様ではなく、魔王様だが。

その魔王は、まるでこの建物の構造を知っているかのように、響子の手を取って城の中を導いていく。

やがて日当たりの良い応接間に辿り着いた。

身体が沈むくらい柔らかかなソファーに、魔王に手を取られたまま腰をかける。

何だか喉が渴いてきた。

（お茶を煎れてくれるメイドさんがいたらいいのに）

そう思った瞬間だった。

目の前に、ティーセットを手にしたメイド服の美女が現れたのは。「わ？」

あまりのタイミングの良さに驚き、そして気が付く。魔王は響子の手を握ったままだった。いくら響子が想像しても、手を取られている時でないと魔王には伝わらない。タイミングがあまりにもよす

ぎた。彼はそれすら予想していたのだろうか。

ちらり、と目の前に現れた女性を見つめる。

スカート丈のかなり短いメイド服。だが、すらりとした長身にそれはとても良く似合っている。長い真っ直ぐな髪は、まるで絵の具で染めたかのようなピンク色だった。緑色の瞳が、響子を見つめて微笑む。魔界の住人には違いはないだろう。けれど、その微笑みは柔らかく、親しみすら感じられる。

そのメイド服の美女は、優雅な仕草で響子の前に紅茶を置いた。そして潤んだ瞳で見つめる。

「魔界を救って下さり、ありがとうございます。私も甦る事が出来ました。これからは、響子様にお仕え致します」

目の前に魔界の王たる魔王がいるというのに、彼女はそちらを見ようともしない。ただ感激したように響子を見つめているので、少し決まりが悪くなり、魔王を見上げた。

だが彼も満足そうな笑みを浮かべるばかりだ。

（私……。騙されてたりして……）

こくり、と紅茶を一口飲む。それはとても良い香りだった。

何処までが本当なの？

「ところで、勇者の事情って何だったの？」

そうだ、それを聞きに来たんだった。

紅茶のおかわりを注いで貰いながら尋ねる。

「ああ。そうだったな」

革張りのソファーに足を組んで座っていた魔王様が、思い出したかのように頷く。

（本当に忘れっぱいだけだったりして……）

その足を組んで座っている姿が、嫌味なくらい絵になる。

「魔界を滅ぼしたのは、前にも言ったように勇者ラールだ。だが、勇者といっても実際はただの教会に仕える小娘。剣は多少使えるようだったが、魔力はまったくなかった」

女？ 勇者って、女だったのか。

「そんな女がどうして勇者と呼ばれるようになったの？」

紅茶のおかわりと一緒に、焼きたてのクッキーが出てきた。これがまた、甘い香りで食欲をそそる。

「能力的にはたいしたことのない女だったが、希有能力があった。

天界の者と会話する事が出来たのだ」

「……なるほど。だから天啓を受けた勇者ってことになったのね」

メイド服の美女にかいがいしく世話を焼かれながら、銀髪の美形が語る話に耳を傾ける。そうしていると、だんだん勇者達が悪いような感覚になっていくから不思議だ。

「その天啓を受けた天神ラフィードと恋に落ちた勇者は、天王に自分が天界に行くには善行を成し遂げなければならないと言われた。それも、普通の人間が出来るような善行では駄目だ。そこで天界と長い間争っている魔界を滅ぼそうとしたのだ」

「ぬわ……。自分の恋の成就の為にひとつの国を滅ぼしたのか。あ

くどいなあ」

「たかが恋で、と呟く響子を、魔王もメイド服の美女（名前を聞くのを忘れてた）も不思議そうに見つめている。

「え？ 私、何か変なこと言った？」

「人間の、特に女性という者は、恋愛中心に生きていると思っていた」

魔王の答えに、それも偏見だなあと思いつつ、響子は何も返せない。

恋を、したことがないから。

そこまで深く、誰かを愛したことがないから。

「まあ、人間も色々いるってことよ。たまたまその、勇者になったひとが恋に生きる女だったのね」

そう返すしかなかった。

それにしても、と話題を変えるように、声を大きくする。

「いくら天啓を受けたからって、ただの教会に仕える女性に、魔界を滅ぼす力があつたの？」

それに答えたのは、メイド服の美女。

「ただの人間の小娘だからこそなのです。魔界と天界は、不倶戴天の敵同士。人間と恋に落ちた天神ラフィードも天界一の戦士であり、長い間魔界と戦ってきた天敵とも言える存在でした。けれど天界の住人はもちろん、魔界の住人にも人間を害する事は出来ません」

「ちょ、ちよつと待って」

話を途中で遮り、響子は一瞬、紅茶を飲んで心を落ち着ける。

何だか話がとんでもない方向になってきた。

「天界とか魔界とか、まるでティーン向けの小説みたいなんだけど。まあ、魔王さまがいるんだから天神とかがいてもいいのかもしれないけど。えーと、取り敢えず頭の中を整理するからちよつと待ってね」

落ち着こう。

数回深呼吸して、響子はまずメイド服の美女に問いかける。
色々と情報が多くて混乱している。

それに魔王やメイド服の美女の話も、最初よりも少し、食い違っているような部分もある気がする。

何でも疑ってかかるのも問題かもしれないが、すべてを信じるのも危険かもしれない。

ひとつずつ情報を整理していこう。

このまま都合の良い話だけを聞かされて、利用されるのは嫌だ。

響子は、気になっていることからひとつずつ、尋ねていく。

「まず聞きたいこと。あなたの名前は？」

「私はリリスと申します。魔界が天界の戦士と勇者に攻め込まれたとき、私も殺されてしまいました。ですが、響子様の御陰で甦る事が出来たのです。本当に、感謝しております」

美女に潤んだ瞳で見つめられ、思わず胸が高鳴る。

（まてまてまて、恋に目覚める前に同性に目覚めてどうするんじゃない）

「いえいえ、どういたしまして。などと思わず口走り、そして魔王に視線を移す。

「それで、魔王様には名前はあるの？」

「もちろんある。だが、我を名前で呼ぶ者などおらん。だからお前も知る必要はない」

「……ふーん」

なにやら怪しい。響子はまずひとつ、と心の中で呟く。もちろん魔王からは離れ、考えている事が伝わらないようにした上で。

一、魔王の名前に関する情報を集める。

「それで、もういっこ確認ね。私と出会った時、魔王様は腹心の部下の敵を取りたいって言ってたよね。でも、ここに着いた時は勇者

に復讐する気はない、魔界を再建したいだけだって言った。どっちが本音なの？」

ずい、と詰め寄る。

「協力するって言っちゃったし、魂を取られるのもヤダから出来る事はするつもり。でも、騙されたり誤魔化されるのは嫌なの」

なんでそんな話になるの？

言いたい事はすべて言った。

きっぱりと言い切り、さあ答えてみると言わんばかりに真正面から魔王を見据える。（やつぱいい男だなあ、と思いつつ）

そんな響子の態度を見て、魔王はやんわりと笑みを浮かべた。

「ふ……。どうやら馬鹿ではないらしいな」

ようやく本性を現したか。心のチェックリストを更新だ。

二、魔王の本音を探る

「こう見えても見た目ほど馬鹿じゃないの。残念だけど。で、あなたの本心はどつちなのか聞かせてくれる？　じゃなきゃ私、協力なんか……」

メイド服美女のリリスは天界の住人はもちろん、魔界の住人にも人間を害する事は出来ないと断っていたが、何処まで本気かはわからない。けれど、彼等が自分の協力が必要としているのだけは、確かだ。少しくらい強気に言っても……。いや、これくらい言わないと良いように使われるだけだろう。

「残念っていうのは見た目が馬鹿に見えるという、そこか？」

「違うわッ。変なところにつっこむな！」

怒鳴ってから、ペースを崩されていると気が付き、真顔になる。

「教えてくれないのなら、私だって協力なんかしないんだからね」

響子が本気だとわかったのだろうか。魔王は、少し体勢を起こして（今までソファアに転がっていたのだ、人が真面目に話をしているというのに！）語り出す。

「……別に、深い意味などない。ただ」

「ただ……？」

「思いついたままを言っていたただけだ」

「はい？」

これだけの美形、しかも何やら怪しい雰囲気すら漂わせている魔王様だ。天界とやらを征服する、くらいは言いそうだと覚悟していたというのに？

「それってつまり？ その時は復讐してやりたいと思ってたけど、魔界が復興していくのを見てたらどうでもよくなったとか？ ま、まさかね。そんな筈……」

「うむ。お前の言う通りだ。案外簡単に復興出来そうだからな」
詳しく説明する前に理解した事に機嫌を良くしたのか。魔王は満足そうに笑う。

その笑み。

まさにすべてを手に入れた王者が浮かべるに相応しい、満ち足りた笑みだった。

「アホかーッ」

響子は立ち上がり、力一杯叫ぶ。

「なんでそんなにテキトーなの？ あなた魔王なんでしょ？ そんなんでいい訳？」

「ふ。我がもし、優れた王ならば。色呆けした天界の戦士などに負けたりはせん」

「な、なんでそんな駄目な方向に自信満々なの？ あなたがこんなんじゃ、部下達はさぞかし苦労を……」

目が合った。それこそ、先程の魔王の比ではない。

よくぞ言ってくれたと言わんばかりの、リリスの感動に潤んだ美しい瞳。

（く、苦労していたのね……）

「……なんだろう。かえって騙されたままの方がよかった気がするの」

虚しく呟いてみるものの、聞いてしまったものは仕方ない。

（そうよ。考えてみたら、これだって私を騙す嘘かもしれないじゃん！）

そう思ってみるものの、あの魔王はともかく、メイド服美女の涙は本物のような気がする。

だが、その後に魔王が言った言葉の衝撃は、予想を遙かに超えていた。

「つまり、色々と面倒になってな。ついでにこの国をお前に任せてしまおうと考えているんだが」

「……へ？ それってつまり？」

「新しい魔界の創造主。女王となり天界からこの国を守ってくれ」
えーと、それってつまり……。丸投げですか？

（じよ、冗談じゃないッ。そんなもの押しつけられてたまるもんですかッ）

しかも理由が面倒、だなんて。そんな花見の場所取りや飲み会の幹事みたいなノリで押しつけられるようなものでもない。

「恐れながら」

だが、響子より早く魔王に進言してくれた者がいた。メイド服の美女、リリスだ。

「響子様はか弱き女性でございます。魔神の中には気性の荒い者もおりますので、いかに魔王様が認めた後継者であろうとも、素直に従わぬ者もいるかもしれませぬ」

やはり彼女は自分の味方だ！ とそれに同意するように思い切り頷いた。だが。

「そこで私に考えがあります。響子様を、恋人になさったら如何でしょう？ 魔王様の恋人が魔界を救い、自分達をも甦らせてくれたのだと知れば。皆、響子様を敬い、忠誠を誓うでしょう」

ちよつとまで、なんだその美談は！

こっちはこの非道な魔王に魂を取るぞと脅されて、仕方なく協力してるのというのに！

だが、さっきの天界人を馬鹿にしたような口調から察するに、魔王本人は恋愛とかにはまったく興味がないようだ。（これが唯一の共通点なんだけど）

きつとくだらぬと一蹴するに違いない。いや、そうして欲しい！
期待を込めて、振り向く。

かなり本気ですね？

けれど願いというものは、大抵は叶わないものだ。

魔王は特に考えもせず、それでいいか、などと呟いた。

（しまった！ 逆に興味がなさすぎてどうでもいいのかッ）

だが、恋をしたことがないと言ってもそれなりの憧れは抱いている。いかに美形といえど、面倒そうにお前でいいなんて言われても嬉しい訳がない。

「ヤダ！ 私は絶対に嫌だからね！ 誰が恋人になんかなるもんですか」

思い切り否定する。

「き、響子様……」

リリスがこの世の終わりのような絶望を込めた瞳で、見つめてくる。

「どうしてですか？ どこがお気に召しませんか？ 魔力も強いし美形だし、なかなかの優良物件ですよ？」

思えば彼女は、必死だったのかもしれない。

まだ甦った魔族は自分だけ。しかも、魔王にはやる気がない。どれだけこの先自分が苦勞するか、想像しただけで気が遠くなる思いだったのだろう。溺れる者は藁をも掴む、の心境だ。

でもいくらリリスがメイド服の美女でも、それを受け入れたら苦勞するのは自分になってしまう。

「確かに美形だけどね。誠意が足りないのよ、誠意が！」

お前でいいか、なんて言われて喜ぶのは、よっぽどのマゾ女だけだろう。

「せ、誠意ですか……」

その言葉を聞いた途端、リリスは目を反らす。

「誠意はちよつと、持ち合わせが……」

なんて正直な魔族だ！

でも、ここを攻めれば回避可能かもしれない。

「顔がいただけじゃ駄目なのよ、男は。むしろ顔がいいからこそ、余計に嫌ってこともあるのよね。男は誠意！これに限るよ、うん」
勝ちを予測した響子はその後も色々と言いつける。だが、ここで予想外の展開が起きた。あまりにも言われ続けてさすがに気に障ったのか、魔王が反撃してきたのだ。

「まあ、我もどうせならもう少し若くて素直な女の方が……」
なんですって？

びたり、と響子の動きが止まり、ふるふるとその肩が震える。もちろん、魔王の言葉にショックを受けたのではない。

「ふ、ふふふふ」

地獄の底から響き渡るような低い声。何事かと、リリースが怯えたような瞳をする。

（き、気温が下がった？ 寒い……）

ひんやりとした空気の中に響く声。

「よくも、よくも微妙な年頃の女性に年齢の話をしたわねえええ」
許さないから、と響子は笑みを浮かべる。

「絶対に許さないっ。後で後悔したって遅いんだからね！」

「お前こそ撤回するのなら今のうちだぞ」

売り言葉に買い言葉。ついむきになった響子はいつのまにかこんな宣言をしていた。

「絶対にあなたの方から恋人になってくださいって言わせてみせるんだから！」

（ああ、私のバカ……）

あれから、一時間後。

ようやく怒りが収まった響子は、激しい自己嫌悪に襲われていた。豪奢な部屋の、ふかふかのソファに身を投げたまま何度も溜息

をつく。ついその場の勢い？ で、魔王と賭けをしてしまったのだ。お互いに、相手をその気にさせてみせる。好きになった方が負け。負けた方は、相手の言う事を何でも聞く、という賭けを。

「あーん、もう私のバカバカ！ 恋すらしたことないのに、どうやって相手をその気にさせるのよ！」

ソファーから身悶えしながら転げ落ち、上等な絨毯が敷かれている床の上をゴロゴロと転がる。

「そもそもあのコオロギ野郎が、年齢のことなんか言うから！ あーもー、なんで男って若い子が好きなのさ。むかつくうつ」

今度は床の上に仰向けになったまま手足をばたつかせる。

「ああ、でもこんなに憎いなら、こっちから好きになる事は絶対ないから負けないかも。相手が美形っただけで恋が出来るなら、とつくにしてる筈だもんね」

そうだそうだ、とひとりで呟いていると、頭上から声がした。

「……床の上で何を暴れてるんだ？ 響子」

笑いを含んだ柔らかい声。

（ん？ 誰だろう？）

優しい声だった。転がったまま見上げると、そこには。

「げ……」

絢爛豪華な装飾品をあしらったファンタジー風の衣装ではなく、普通の服装をした魔王の姿。銀色の綺麗な髪はゆるく三つ編みしたままで、黒いVネックのセーターによく映えている。紅い瞳を隠すように掛けている、少し色のついた眼鏡。端正な顔立ちで、まるで恋人を見つめているかのように優しい笑みを浮かべていて。

（くっ……。こいつ、かなり本気でやる気だ……！）

引き攣った顔に、冷や汗が流れる。負けてられない！

言わなきゃよかった？

「響子、あんたいったい何してるのよ？」

携帯電話から響く友人の声に、身体が沈む豪華なソファに座った響子は溜息を付く。

「ねー……。ホント、何やってるんだろ、私は」

取り敢えず魔王から逃げて自分の部屋と定めた場所に逃げ込むと、とてもいいタイミングで携帯電話が鳴っていたのだ。

そっぴや携帯通じるんだっけ、と思つて出てみると、誕生日にともないメール（四捨五入で三十）のメールをくれた友人で。

「会社には休職届け、しかも部屋には鍵がかかつて誰もいない。

一応心配したんだからねー？」

そこは一応つてつけなくてもいいんじゃないだろうか。

「で、今あんたは何処いるのさ」

「ん？ んーと、なんて言えばいいんだろう……」

魔界です、なんて言える筈もない。ちよつと引いた口調で、もうそっぴやのは卒業しようよ、いい年なんだから……と言われるのがオチだ。

「えーと、ホテル？」

「なんで疑問系なのよ……」

彼女、美香子とは高校生の時からの付き合いだ。もちろん同級生なのだから同じ年なのだが、二月生まれで年としては一年違つので、何かにつけて響子を年寄り扱いする。

たかが一年なのに。だが彼女に言わせると、全然違つらしい。

（まあ、もう年の話はいいのよ。それよりどうやって説明すればいいんだろう……？）

一応とはいえ、心配してくれているのだから何も説明しない訳にもいかない。

「ええとですね。実はある人に付いてきて、ちよつと遠い場所にい

るですよ」

「何よ、ある人って。……まさか、男か！」
違う、と言おうとした。

男ではあるのだが、魔王さまだし。

けれど響子よりも早く、美香子が否定した。

「なんてね。そんな訳なかったね。ごめんごめん。だって響子だし。どうせ親戚のおばちゃんか何かに呼び出されたんでしょ。響子だしね」

恋愛をしたことがない、と打ち明けた事はなかった。

だから今まで一度も彼氏が出来たと言ったことはなかった。

でもそんな、の たのくせに生意気だぞ、みたいな口調で言われたら、黙ってはいられない。

それに。

（あんだだって、大学の時を最後に今まで彼氏いないじゃんかよ！）

「ふふ」

ここに、多くの言葉はいらない。

ただ少し勝ち誇ったように笑うだけでいい。

その効果は抜群だった。

「な、何よその勝ち誇ったような笑みは。……ま、まさか本当に男なのか？」

「さあね。まあ、ご想像にお任せします。じゃ、忙しいからまたね」

そう言って、電話を切る。美香子はひとり、色々と想像して悶々とするだろう。誕生日当日にあんなメールを送ってきた報いだ。そう、それで終わる筈だった。

それなのに。

「ちよつと待てiiiiiiiiii」

「へ？」

「それ……本当？」

今まで一度も聞いたことのない、友人の低く押し殺した声。

（な、なに？ 何が起こったの？）

「み、美香子？」

「本当かどうか、聞いているのよおお」

「ばしん、と机を叩く音がした。反射的に背筋を伸ばして答える。

「ほ、本当よ。男の人なのは、確か。でもね……」

「会わせて」

はい？

「言わなきゃよかった、と後悔したのは今日で二回目だ。とことん学習しない女よね、私って……」。

「会わなきゃ信じない。だって響子に男とか……」

どういう意味だ。

でも、ここでまた後悔するような発言はしたくない。慎重に、言葉返す。

「会わせてって言われても。私、ちょっと遠い所に……」

「あ、そう。もしかして嘘なの？ ヤダなあ。別に今更、そんな嘘言わなくても私はわかってるって」

今更ってどういうことだ！

「いいわよ。今すぐ行くから後悔するなよおお」

電話を切った後、後悔したのは自分の方だった……。

どうするの、これから……。

その笑顔は反則ですよ？

響子はウロウロと、部屋の前の廊下を歩き回っていた。部屋の中にいるのは魔王様である。

けれど、ここでどうしたらいいかわからずに歩き回っているのなんてわかってる筈なのに、彼は沈黙を守っている。

（どうしたらいいんだろ……。もう、なんであんなこと言っちゃったのかなあ）

今すぐ行く、などと言ってしまったのだ。これ以上待たせたら憐憫の声で、今更無理しなくてもいいんだよ。今更、などと言われるに違いない。

（そうだ、別に恋人だって言ったんじゃないんだし、あつちに連れて行って貰うだけでいいんじゃない？ 家に来てって言つといてさ。うんうん。会わせるだけでいいんだし）

幸い、今の魔王様は瞳と髪の色は特殊だが、ファンタジー系の衣装ではない。外人だ言えばきつと大丈夫だろう。

（だって美香子だしね……）

ようやく覚悟を決め、こんこん、と部屋をノックするが返事はない。

「入りますよ〜？」

がちやり、とドアを開ける。すると魔王様はソファーに寝そべったまま、真剣に雑誌のような本に目を通してている。

（何を読んでいるのかな？）

響子が入ってきたのにも気が付いていない。それほど熱心だった。あのお……。ちょっとお話があるんだけど、忙しい？」

ちらり、と彼が手にしている雑誌に目を向ける。

「……へ？ な、何を読んで……」

彼が手にしていたのは。

「ふーん、るぶふたりの東京デート、かあ。……って、何でそ

んなもん……」

旅行雑誌で有名な「るぶ」が、そんな雑誌を出していたとは知らなかった。それ以前に一度もデートなるものをしたことがない。いや、今はそんな余計な告白をしている場合ではなく。

「まままま魔王様。なんでそんな雑誌を読んでののお？」

「ん？ 響子か」

その絶叫でようやく気が付いたように、魔王様は顔を上げる。

「リリスが持ってきた。なかなか面白いぞ」

美しいメイド服の魔族を思い浮かべ、がつくりと肩を落とす。

（どういふつもりですか、あの人は……。いや、人じゃないんだけど）

彼女にしてみれば、こんな手の掛かる魔王様よりも、新しい創造主、女王の誕生に期待を込めているのだらう。そしてそれには、魔王が響子を恋人にすることが必要だ。

「ふ……。援護射撃って訳ね。でもね、魔王様。残念ながらデートスポットなんて行かないわ、私は」

もちろん見飽きたとか、そんな理由ではない。一度もデートしたことがないのだからそれはない。

理由はひとつ。恥ずかしいからだ！

行ったことがないから予想でしかないけれど、きつとそういう有名な場所には若いカップルしかいないに違いない。そんなところにわざわざ行くもんですか！

「……別にお前と行くとは言っていないが」

「な……！」

なんでこう、人をカッとさせるのが上手いんだろう。さすがは魔王様。けれど何気なくこちらを見たその魔王様が、突然態度を変える。

「いや、もちろん誘おうとは思っていた。だが、お前の好みではなかったらしいな。残念だ」

きつと途中で賭けのことを思い出したに違いない。というか、忘

れるくらい夢中になって読んでいたのか、魔王様は。

（そうだ。これを利用して連れ出せば……）

にやり、と笑う。偶然を装って美香子に会わせれば、それでミッシヨンクリアだ。

「私の住んでた町にも綺麗な景色の場所、結構あるよ。よかつたら見に行かない？」

即答ではなかった。彼は銀色の髪をさらりと掻き上げて、考え込んでいる。先制攻撃をされたと思っているのだろうか。

「べ、別に行きたくないないないんだけど。ただ、そういう雑誌に載ってるのって大抵景色の良い場所でしょ？ 行きたいのになって思っただけだし」

怪しまれないようにそう言っただけだったが、これじゃまるでツンデレキャラだ。

（うーん、やっぱり駄目か。正直に言っただ方がいいのかなあ……）

魔王様をお願いするか、美香子に謝るか。

どっちかを選べと言われたら迷うまでもなく魔王様だ。

「えっと……」

実は、友達に紹介しろと言われまして。

そう言っつもりだった。けれど、顔を上げた響子の瞳に映ったのは。

「ああ、行ってみたい。連れて行ってくれるか？」

何度も見た皮肉そうな笑みではなく、淡く微笑む彼の姿。

その笑顔は反則だろう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3076p/>

恋人は魔王さま？

2011年2月26日22時41分発行